

ガズナ朝のハージブ

稲葉 穰

はじめに

「ハージブ(hajib)」とはアラビア語の動詞 *hajaba*(隠す, 覆う)から派生した語で, 元来は, 様々な人間が勝手に君主に接近するのを制限する役目を負う者を意味した。概ね「侍従」と訳される。ハージブの職務, 地位は時代, 地域によって様々に異なると言われているが, 本稿は10世紀末にアフガニスタン東部を中心として成立したガズナ朝におけるハージブの実態の解明を目的とするものである。

数々の征服戦争で知られるガズナ朝第三代スルタン・マフムード *Maḥmūd* の時代, また, 後継者争いを経て即位したその息子, 第五代スルタン・マスウード *Mas'ūd* の時代, スルタンの手足となって働き, 軍団を指揮した者達の多くが同時代史料においてハージブと呼ばれている。このガズナ朝のハージブについて多少なりとも説明を加えているのは, 管見の限り, ナーズィム *M. Nāzim*, キョプリュリュ *F. Köprülü*, アンワリー *H. Anwarī*, ボズワース *C. E. Bosworth*, の四人である。

ナーズィムはハージブを, ガズナ朝軍内の将校の階級のうちに, 最高司令官たるスルタン, およびその次に位し, スルタンの親族が任じられたというホラーサーン *Khurāsān* のスイパーフサーラー(*sipāhsālār* 軍司令官)の下に位置し, 軍団(*jaysh*)を指揮する者であったとする。只, 彼自身認めている通り, このような構造を明確に示す史料的根拠はない [*Nāzim 1971: 141-42, 142 n. 1*]。

キョプリュリュによればハージブとは, トルコ人グラーム(*ghulam*)が昇進して得る職であり, やはり君主の側近くに仕える侍従であった。そして後に他の職に任じられてからも, 彼らは一種の称号としてハージブの名を持ち続けていたという [*Köprülü 1967*]。

アンワリーも同様に, ハージブとは侍従・儀典官であったとし, 他の職に任じられた後も称号としてハージブを名乗っていたとする [*Anwarī 1976: 32*]。

これに対しボズワースは、サーマン朝時代、既にハージブは宮廷内の諸事を司どるという役目よりも、一義的には高位の軍人を意味するようになっていたとし、サーマン朝の諸制度を受け継いだガズナ朝においてもハージブは軍人としての性格を色濃く有していたと述べている [Bosworth 1965]。

このように従来の研究ではガズナ朝のハージブについて統一の見解は示されておらず、また上記四人の説明も多分に概説的に述べられたもので、実例に即して検討がなされているとは言い難い。筆者は以前、ハージブをガズナ朝の政治的支配層の重要な構成要員と考え、「宮廷内の諸事を扱う「侍従」という元来の性格と、スルタンとその親族であるところのアミールを除いて、ガズナ朝軍内で最も位の高い軍人としての性格をあわせ持っていた」と説明した [稲葉 1986: 138]¹⁾ ののであるが、その時は紙幅の関係から詳論することができなかった。そこで本稿において、同時代史料の用例の検討を通じてガズナ朝のハージブの持っていた機能を明らかにし、国家体制におけるその位置を考えてみたいと思う。

I 侍従としてのハージブ

1) ハージブの職務

まず最初にガズナ朝のハージブが侍従という性格を有していたかどうかを検討する。只、そのためにはこの時代、侍従としてのハージブが具体的にどのような職務を持っていたのか、あるいはどのような職務を持つと考えられていたのかを明らかにしておかねばならない。

幸いなことに我々はこの点に関して、11世紀に書かれた二つの重要な文献を利用することができる。一つはヒラルル・アッサービィ Hilāl al-Ṣabi' の著作 *Rusūm Dār al-Khilāfa* である。これはアッパース朝カリフの宮廷における儀礼や公文書の様式などを記した史料であるが、その中にハージブについて述べた一章がある²⁾。もう一つは、カラ・ハン朝治下のカーシュガル Kashghar においてユースフ・ハーッス・ハージブ Yūsuf Khāṣṣ Ḥajīb により著された *Qutadghu Bilig* である。これは君主のための教訓や道徳を韻文の形で記した史料であり、やはりその中大ハージブについて述べた一章がある³⁾。そもそも侍従とは宮廷内の諸事に携さわる者である。それゆえ、同じ時代に東方イスラム

1) 本稿の内容のかなりの部分が稲葉 1986と密接な関係を持っている。あわせて参照頂ければ幸いである。

2) RD: 71-89; Salem 1977: 59-71にあたる。尚、M. 'Awad はテキストの86頁以降を別のものと看做し、この部分を二つの章に分けているが、Salem は全体をまとめた一つの章と考えている。

3) 「第31章 Ögdülmiş が王に向かって大ハージブ職には如何なる人物が適当であるかについて説明する」[QB: 257-266(バイト番号2435-2527); Dankoff 1983: 119-123; Иванов 1983: 199-205]。尚、Dankoff 1983, Иванов 1983については間野 1984を参照されたい。

世界の両端において書かれたこの二書の記述を照合することにより、この時代の侍従としてのハージブの一般的な姿をある程度明らかにすることができると思われる。

まずハージブの職務についての両書の記述を見てみよう。

ヒラルル・アッサービィは

[宮廷に]⁴⁾入って来る者、出て行く者を[処理する]のは彼(ハージブ)の責務である。彼は廷臣達(hawashī)に、その負うべき仕事を各人の[能力の]限界を越えぬように割りあてる。その者に出来ない仕事を押しつけてはならない。また[ハージブは]彼らが自身の行動において、注意深く、慎しみを持ち、混乱を生ぜしめることなく、忍耐をもって仕え、勝手な振舞をせず、常に謙遜の気持ちを持つように彼らを監督するのである。[RD: 71]

と述べ、続いて幾つかの逸話を引用してハージブの職務を説明している。以下その概要を記す。

- A カリフの宮廷に仕えていた者達が、勤めを終えた後宮廷内の一室に集まって、靴を脱ぎターバンを頭から外してチェスやダイスをして遊んでいるということが、カリフ・アルムウタディド al-Mu'tadid の耳に入った。カリフはその全員を鞭打つように命令を出し、ハージブのハフィーフ・アッサマルカンディー Khafif al-Samarqandi がそれを執行した [RD: 71-72]。
- B カリフ・アルムウタシム al-Mu'tasim がジュース(jullab)を飲んでいたら、法官(qadi)の一团が入廷許可を求めてきた。カリフは許可を与えたが、ハージブは、カリフが酒を飲んでると誤解されることを恐れてカリフの許可命令を差し止め、まずカリフの前にあった水差しを片付けさせ、それから法官達に入廷許可を与えた [RD: 72-73]。
- C カリフ・アルムティーイ al-Muṭrī の時代、有力な臣下の一団が宮廷にやって来た。彼らは皆、格式通り黒い服を着用していたが、一人ムハンマド・ブン・ウマル・ビン・ヤフヤー・アルアラウィー Muḥammad b. 'Umar b. Yaḥyā al-'Alawī のみは白い服を着ていた。ハージブのムウニス・アルファドゥル Mu'nis al-Faḍl はそれゆえムハンマドの入廷を許さず、結局追いかえた [RD: 73-75]。
- D カリフ・アルムティーイの時代、高名な法官にしてウマイヤ家の子孫であったイブン・アビー・アッシャワーリブ Ibn Abī al-Shawarib が赤い履物を履いて宮廷にやって来た。ところが赤はカリフの色であり、その色の履物を履くことはカリフの権威に挑むということの意味した。そのためハージブのアブー・アルハサン・ブン・アビー・

4) 以下、引用文中、[]内は筆者による補足、()内は原語および語句の説明である。

アムル・アッシャラービー Abū al-Ḥasan b. Abī ‘Amr al-Sharābī は彼を追いかえした [RD: 75-76]。

E カリフ・アルカーヒル al-Qahir の時代、一人の下級の書記が宮廷内のベンチに足を組んで腰掛けていた。するとそこに居あわせた、ハージブの従者 (khalīfa al-ḥājib) である彼の友人が彼の足を強く叩いた。宮廷内でそのような無作法な座り方をしている者がいたら、その者を宮廷の外へ放り出すようにとの命令が下されていたからであった。その友人は彼に、二度とそのような座り方をせぬよう、また宮廷内で頭を剥き出しにしていたり、だらけていたり、下品な冗談を言ったりしないようにとの注意を与えた [RD: 76-77]。

F 行列 (mawkib) が行なわれる日、大ハージブ (ḥājib al-ḥujjab) は行列の状況をカリフに報告する。カリフが接見を行なう場合には、大ハージブは臣下達に、そのランクに従って順番にカリフの玉座の前へと入っていく許可を与える。入ってきた臣下はカリフの前で挨拶を行なった後、ハージブ達に導かれて各々の所定の場所に立ち並ぶ [RD: 78-79]。

以上のことから、アッパース朝の宮廷におけるハージブの職務とは、廷臣の行動の監督と規律違反者の処罰 (A, E), 宮廷へやって来る者達の入廷の可否の決定 (B, C, D), カリフの接見等の儀式の差配 (F) のおおよそ三つであったと言える。

一方、*Qutadghu Bilig* に述べられているハージブの職務も大体三つに分類できる。(〈 〉内は Arat の校訂テキストに付されたバイト番号。)

第一は、財務官 (agrīči), 書記官 (bitigči) 等の官吏, あるいは仕立て屋 (tonči), 靴職人 (etükči) 等の職工など、貴賤全ての者とベグ達 (begler) の間を仲介し (2493-94), またマザーリム法廷では訴えを取り次ぐ (2499) など、君主と他の者の間の仲介を務めることである。

第二は宮廷内外 (ič taš) の風紀の取締り (2500) である。

第三は、外国よりの使節 (yat baz yalávač) の世話 (2495-96) を含む、宮廷儀式の規範、慣例 (törü hem tökü öngdi) を司どる役目 (2490) である。

これらは先に見たアッパース朝宮廷のハージブの職務にほぼ対応するものである。そこで、両書の記述をもとに侍従としてのハージブの職務をまとめるならば、

- (i) 廷臣の行動の監督, 取締り, および規律違反者の処罰の務め。
- (ii) 入廷の許可, 不許可を司どる接近制限の務め, および君主と他の者の間の仲介の務め。
- (iii) 君主の接見等の儀式に際してその差配を行なう儀典官の務め。

ということになる。

ところで、*Rusūm Dār al-Khilāfa, Qutadghu Bilig*の両書にはまた、ハージブとなるための資格、条件も記されている。この時代のハージブの一般的な姿を知る一助となると考えられるのでここで少々触れておきたい。

*Rusūm Dār al-Khilāfa*には次のように記されている。

ハージブの道(sabīl)とは[以下の如し。すなわちハージブは]中年(naṣaf wa muktahal)⁵⁾で、諸事を経験し、試練を経て確固たる人物となった者、あるいは慎重な、年長の人物(shaykh)で、時によって試され磨かれてきたような者でなければならない。彼は、何を行ない、何を行なわぬのかを知りうるだけの理性と決断力を備えていなければならない。美しい顔立ちの者(ṣabḥān)でなければならない。[RD: 71]

一方、*Qutadghu Bilig*には、同書の道徳、教訓の書としての性格ゆえに、ハージブの資格、条件がより細かに述べられているが、それらは内容から以下の三つに分類できる。(〈 〉内はバイト番号。)

第一は、誠実であること〈2436〉、控えめで純粋な者であること〈2441〉、知的で注意深いこと〈2453〉、敬虔で純粋な信仰の持主であること〈2461〉、健全な心の持主で思慮深いこと〈2469〉、穏やかで物静かな人物であること〈2473〉、忍耐強く自己を律することのできる人物であること〈2480〉等、内面的性質や信仰心に関する条件である。

第二の条件は、多くの知識を有していること〈2441〉、宮廷の規範(töri)を熟知していること〈2474〉、洗練されたマナーを完全に身につけ、字を能くすること〈2482〉等、知識、経験の豊富さである。

第三の条件は、美しい顔立ちで、身綺麗(yülüg)にしており、雄々しい声を持ち、明瞭な言葉を話す〈2458〉など、他の者に好ましい印象を与え、畏敬の念を抱かせるような外見、様子をしていることである。

以上の記述をまとめるならば、ハージブの条件とはおおよそ、

- (i) 様々な徳目に秀い出ており、信仰心篤き者であること。
- (ii) 学識、知識を有し、ある程度年をとった経験豊かな人物であること。
- (iii) 他の者に好まれ、尊敬されるような容姿の持主であること。

の三点であったと言えよう。もちろんこのような資格、条件が実際のハージブの任用にどの程度反映されていたのかを年代記史料において確認することは極めて困難である。只、これらの資格、条件が、この時代の東方イスラム世界においてある程度の一般性を持ったと看做しうるならば、それをガズナ朝に敷衍して考えても全く誤りとは言えぬであろう

5) M. 'Awadによる註[RD: 71 n. 2, 3]に従う。

し、なにより、これほど様々な条件が求められたという事実自体が、逆に宮廷におけるハージブの重要性を示していると言えよう⁶⁾。

2) ガズナ朝の場合

次に前節で確認した侍従としてのハージブの職務をもとにして、ガズナ朝のハージブが侍従としての性格を有していたかどうかを考察する。

第一に、廷臣の監督、規律違反者の処罰の務めであるが、ガズナ朝のハージブもまた、スルタンの命令を受けて、規律に違反した者や罪を犯した者を処罰し、あるいは処刑するという任を負っていた。それは以下のような例から明らかとなる。

- (a) スルタン・マスウードの命により、ハージブが、罪を犯した「絨毯敷き (farrash)」達を鞭打ち、罰した [TB: 158]。
- (b) アブー・サフル・ザウザニー Abū Sahl-i Zawzanī が軍務庁長官 ('arid) の職から罷免された時、宮廷から派遣されたハージブがアブー・サフルを捕縛し、その家財を没収した [TB: 415]。
- (c) ハージブの Khumārtigīn Turshak という人物が、一人の徴税官を絞首刑に処するようにとの命令を受け、配下⁷⁾ に命じて刑を執行させた [TB: 561]。

第二に、君主への接近制限、および君主と他の者の間の仲介の務めであるが、この職務もまた、ガズナ朝のハージブのうちに認められるものである。以下はその例証である。

- (d) スルタン・マフムードの在位中、ヘラート Harāt に任じられていたマスウードのもとへ父よりの使者が到着した。マスウードのハージブはまず使者を誰何し、使者が持参した手紙をマスウードに取り次いだ [TB: 149]。
- (e) マスウード即位後、アブー・アンナスル Abū al-Naṣr がハージブに任じられた際、「このような人物は伝言 (paygam) のために、玉座の御前に必要である。」と言われた [TB: 377]。
- (f) スイッティー・ザッリーン Sittī Zarrīn という名の女楽師 (mutribā) はスルタン・マスウードに非常に近く、女ハージブ (ḥājibā) の如くであり、マスウードは諸々の件についての廷臣達への伝言を彼女に持たせていたと言う [TB: 510]。

最後に儀典官としての務めであるが、ガズナ朝のハージブがやはり、臣下の叙任、他国よりの使節とスルタンの接見等の儀式を差配し、円滑に進行させる役目を負っていたこ

6) ユースフ・ハーッス・ハージブは、この職務が重要でデリケートなものであると繰り返し述べている (2484, 2490, 2492)。

7) ハージブの命を受けて実際に刊を執行したのは、*amīr-i ḥaras* (*wālī-yi ḥaras*) の Muhtāj という人物であった。*amīr-i ḥaras* の職務については Bosworth 1973: 138 および Bosworth 1985 に説明があるが、ガズナ朝におけるそれについては不明な点が多い。

とを示す例は数多い。主なものを次にあげる。

- (g) マスウードが酒宴を催した際、ハージブ達が有力者達(a'yān)を宴場へと先導した。また当時(マスウード即位直後)最も有力な臣下であった、ホラーサーンのスイパーフサーラール・ガズイー Ghāzī に対しては、ハージブがその出迎えのために宮廷の入口まで出向いた[TB: 174]。
- (h) マイマンディー Maymandī がマスウードのワズィール(wazīr)に任じられた時、賜衣(khil'a)を着るために衣料庫(jāma-khāna)へ向かう彼をハージブが先導し、賜衣を着せて再びマスウードの前へと導いていった[TB: 190]。
- (i) 同じく、ハージブのビルゲテギン Bilgatiġinが大ハージブ(ḥajib-i buzug)に任じられた時、またアブー・サフル・ザウザニーが軍務庁長官に任じられた時にも、各々に賜衣を着せるため、ハージブ達が彼らを衣料庫へと導いていった[TB: 195, 196-97]。
- (j) マスウードによりハージブに任じられたアブー・アンナスルは、マスウードの死後もハージブとして仕え、他国の使節がやってきた時には人々に儀典を説明してやったと言う[TB: 377]。
- (k) カリフの使節を迎える際、ハージブ達は二本の角付きの帽子(kulāh-i dū shakh)、金の腰帯(kamar-i zarrīn)をつけ、盛装して接見場に整列し、その中の数人が使節を迎えに行ってスルタンのもとへと導いてきた[TB: 380, 382, 471]。
- (l) マイマンディーの死後、後任ワズィールとしてホラズム Khwārizm から呼ばれたアフマド・ブン・アブド・アッサマド Aḥmad b. 'Abd al-Ṣamad がマスウードのもとに着いた時、一人のハージブが彼をマスウードの前へと導いた。またアフマドが贈物として持参した宝石の首飾りは、ハージブ達の手を経てマスウードに献上された[TB: 476-77]。

以上の如く、前節で確認した侍従としてのハージブの務めの全てを、ガズナ朝のハージブもまた果していたのである。それゆえ、彼らが侍従という性格を有し、宮廷と深い関係を持っていたとすることができる。

II 軍人としてのハージブ

本章ではガズナ朝のハージブが軍事的性格を有していたかどうかを検討する。

冒頭で述べた通り、ガズナ朝の軍の指揮官の多くはハージブと呼ばれていた。別表にあげたのは、史料においてハージブと呼ばれている者達のうち、明らかに軍を指揮したことがわかる者達である。

ハージブと呼ばれる軍人達

| 名前 | 主な軍事行動 | 典拠 |
|----------------------|---|--|
| 'Alr-yi Qarīb | • マフムード時代, 軍を率いてヌール地方征服 | ZA. 185 |
| Āltuntash | • マフムードのレイ遠征の際, 先遣隊の中軍を指揮 • マフムードのスィースターン鎮撫の遠征に従軍 • BahImnagar 攻撃に従軍 • グール, ガルチスターンへの遠征軍を Arslan Jadhib とともに指揮 • Nardīn 遠征に従軍 • ホラズムシャーとなる | ZA. 193 TY.I. 387 TY.II. 98 TY.II. 123, 140-41 TY.II. 149 TY.II. 259, ZA. 182 |
| Aykūtigīn(?) | • レイ遠征の際, 先遣隊の右翼を指揮 | ZA. 193 |
| Badr | • アラブ・クルド人軍団を率い, Tughril Bek を追う | TB. 804 |
| Bektigīn | • ティルミズの城砦長官として, トルクマーンと戦う | TB. 566-67 |
| Bektigīn | • Nasr b. Sabuktigīn のハージブで, 400/1009年頃 ニーシャープールの守備長官 | TB. 458 |
| Bektigīn-i Chugānī | • ホラズムシャーへの増援軍を指揮 • ティルミズの城砦長官 | TB. 436 TB. 746 |
| Bektughdī | • 宮廷グラームのサーラル • ホラーサーンに侵入したセルジュークに対する最初の派遣軍の指揮 | TB. 94 TB. 626, ZA. 199 |
| Bilgātigīn | • マフムードにやぶれた 'Altigīn を追撃する軍を指揮 • ホラーサーン北辺のトルクマーン駆逐のため, 兵を率いる | ZA. 189 TB. 475 |
| Ertigīn | • サラフスでのセルジュークとの戦いで後衛軍を指揮 • 宮廷グラーム軍団を指揮 | TB. 758 TB. 829, ZA. 206 |
| Eryāruq | • ヒンドゥースターンの軍司令官 | TB. 272 |
| Ghazī | • BahImnagar 攻撃に従軍 • マフムードのレイ遠征の際, 先遣隊の左翼を指揮 • ホラーサーンの軍司令官 | TY.II. 98 ZA. 193 TB. 29 |
| Khumārtash | • トルクマーン軍の司令官 | TB. 77 |
| Nushtigīn-i Walwaljī | • Sarī 近郊の砦の攻略のため軍を指揮 | TB. 588 |
| Qadir | • ニーシャープールの守備長官, 一千騎を率いる | TB. 643 |
| Satulumish | • バードギースの守備長官 | TB. 671 |
| Subashī | • 対セルジューク戦のため, 一万の騎兵と五千の歩兵を率いてホラーサーンへ。 • サラフスの戦いで左翼軍を指揮 | TB.650-51 TB. 758 |
| Yaruqtughmish | • マクラーン遠征軍の司令官として, 四千の騎兵と三千の歩兵を率いる。 | TB. 78 |

この表中にあらわれる人物に限って見た場合、「ハージブ」という語自体が軍事的意味を持っていたかどうかは判然としない。すなわち、史料の中でこれらの者達の名に冠されている「ハージブ」という語を、キョプリュリュ、アンワリーの如く、もとは侍従としてハージブであった者が他の職に任じられた後も持ち続けていた称号である、とする解釈も成立しうるのである。しかしながら、*Ta'rikh-i Bayhaqi* には「ハージブ」という語自体が軍事的意味を持っていたことを示す例が幾つか見られる。

(イ) 421/1030年、父マフムードの死を知ったマスウードはイスファハーン Sipahan からホラーサーンへと向かう途上、レイ Rayy に立ち寄った。レイの町の有力者達は守備隊の駐留を求め、マスウードの書記に

「彼(マスウード)の御旗がイスファハーンにまで達している今、一人のハージブが守備長官(*shihna*)として二百騎を率いてこの地、すなわち我々の町と周辺地とに留まる[必要があることは]明らかです。」[TB: 23]

と申し述べた。

(ロ) 422/1031年、タシュ・ファッラーシュはイラク('Irāq-i 'ajam 現在のイラン西部)のスイパーフサーラルに任じられたが、彼に同行する軍の観閲式の様子を述べた中に次のような記述がある。

朝方、太鼓とラッパが鳴り響き始めた。タシュ・ファッラーシュがこの日ブスト Bust 道からホラーサーン、イラクへと出発するのであった。まずハージブの *jāma-dār* ヤルクトウグムシュ *Yāruqtughmish* が武装し、多くの従者を率いてやってきた。彼の配下が[マスウードの前を]通過し、彼は挨拶をして[所定の場所に]立った。彼の後からは *mahmūdī* のサルハング(*sarhang*)達——三人は金の腰帯、七人は銀の腰帯を締めた——が完全に装備をして続き、その後ろから、抜擢され重要な地位に就けられていた、この帝王の *khazīna-dār* ガウハライーーン *Gawharā'in* がやってきた。そしてこの帝王の数人のハージブ、サルハングが騎兵(*khayl*)を伴って続いた。騎兵達が通過し、指揮官達(*muqaddaman*)が立ち並んだ。次いでスイパーフサーラルのタシュが、立派な太鼓、軍旗を持ち、武具装備を携え、自身の百五十人のグラーム、解放され彼に託された百人のスルタンのグラームとともに到着した。[TB: 373]

(ハ) 425/1034年、ワズィールのアフマド・ブン・アブド・アッサマドは、*Kumījī* 族 (*Kumījiyan*)⁸⁾ の侵入により混乱したフッタラン *Khuttalan* 地方の秩序回復のため、ガズナ *Ghazna* からトハーリスターン *Tukharistan* 方面へと出発したが、その時、

8) *Hudūd al-'Ālam* に次のような記述がある。

「*Kumījiyan* と呼ばれる一族がいる。彼らはフッタラン、チャガーニヤーン *Chaghāniyan* の境域に住んでいる。勇猛で好戦的な者達であり、泥棒を生業としている。彼らの財産は羊と奴隷である。村々や集落 (*rusta*) を多く持つが町は一つも持っていない。」[H'A: 120; Minorsky 1970: 120]

Minorsky 1970: 362-63に詳しい考証がある。

四人のハージブ、十人のサルハング、武装を整えた一千の騎兵が彼に同行した。[TB : 518-19]

と言う。

(二) ホラーサーンに侵入してきたセルジューク・トルコへの対応策を話し合う御前会議に列席していたハージブ達は、ワズィールに意見を求められて、

「我々は臣従する者であり、戦いを事としています。命ぜられた事を遂行し、剣を振るって敵対者達の目論見を打ち砕くだけです。策を考えるのは[我々ではなく]ホー
ジャ(ワズィール)です。」[TB : 614]

と答えた。

(ホ) 428/1037年、マスウードはホラーサーンにおけるセルジューク・トルコの勢力拡大を顧慮せずにインド遠征を行なおうとしたが、ワズィールのアフマド・ブン・アブド・アッサマドはその案に断固反対し、ホラーサーン親征を勧め、

「もしハーンシー *Hānsī*⁹⁾ を落すことをお望みならば、*ghāzī* の將軍達、ラホール
Lahūr の軍、宮廷から任命される一人のハージブをあてれば十分です。」[TB : 700]

と言った。

以上の例に出てくる「ハージブ」を「侍従」と訳すことはできない。特に(ロ)の例では、「指揮官達(muqaddamān)」という語が、直前の「ハージブ」、「サルハング」を指していることは明らかであるし、(二)の例ではハージブ自身が、自分達は戦いを専門にする者であると言明しているのである。また、これらの「ハージブ」を、キョプリュリュ、アンワリーの如く、侍従出身の者が持つ称号だと考えることも不自然である。なぜなら、称号とは一般に固有名詞とともに用いられる性質のものだからである。もちろん、ある称号が特定の個人をあらわす場合もあるが、それも(イ)、(ホ)の例の如く、「ハージブ」の指し示す対象が不定の場合には成立しない。それゆえ、上記の例に出てくる「ハージブ」は軍人のことであり、「ハージブ」という語が軍事的意味を持っていたことを認めねばならない。

只、ハージブは、一般的な意味での將軍・司令官(salar)とは異なるものであるし、また、地方のスイパーフサーラールや城砦長官(kūtwāl),あるいは宮廷グラームのサーラール(sālār-i ghulamān-i sarāy)などの軍事的な職や任務とも異なるものである。例えば別表にあげた者達のうち、ガーズィー、エルヤルクは各々、「ホラーサーンのスイパーフサーラール・ハージブ・ガーズィー」、「ヒンドゥースターンのスイパーフサーラール・ハージブ・エルヤルク」と記され[TB : 67, 282, 291 ; ZA : 197], ベグトゥグドゥ, エルテギンは、「宮廷グラームのサーラール・ハージブ・ベグトゥグドゥ」、「宮廷グラームのサー

9) 428/1037年末に行なわれたマスウードのインド遠征の主目標となった砦。「処女要塞(qal'a al-'adhra')」と呼ばれていた[TB : 704]。その位置については Ahmad 1971 : 59参照。

ラール・ハージブ・エルテギン」と呼ばれている [TB: 94, 877]。これに対して他の者達が単に「ハージブの何某」と呼ばれていることを考えあわせると、ハージブの方は軍人の一種の身分・階級を意味するものであり、スィパーフサーラールや宮廷グラームのサーラールというのは、そのようなハージブ・クラスの軍人に与えられた、地方の軍司令官の職、および宮廷グラームを統率する任務であったと考えられるのである¹⁰⁾。この点は以下の例からも補強されよう。

- (i) 421/1030年、ヘラートのマスウードのもとへ、テギーナーバード Tiginābad でのムハンマド Muḥammad(マスウードの兄弟)の廃位と全軍のマスウードへの帰順を伝えるにやってきた Mangītarak¹¹⁾の労に報いるため、マスウードは彼をハージブに任じた [TB: 55; ZA: 196]。
- (ii) 422/1031年末、ホラズムシャー・アルトゥンタシュ暗殺計画が失敗に終わった後、アルトゥンタシュのマスウードに対する不信感を少しでも和らげるため、マスウードはガズナの宮廷にいたアルトゥンタシュの息子 Satrをハージブに任じた [TB: 421]。

10) ナーズィムはガズナ朝の軍の組織について述べる中で、スルタンを最高司令官とし、ホラーサーンのスィパーフサーラールをその次に置いている。一方、将校の階級としては、軍団を指揮するハージブ、五百騎隊長にあたるサルハング、百騎隊長にあたるカーイド(qa'id)、十騎隊長にあたるハイルトタシュ(khayl-tash)が存在していたとする [Nazim 1971: 141-42]。しかしこの説明には幾つかの問題点がある。

第一は軍事職と将校の階級の問題である。本文中で述べた如く、地方のスィパーフサーラール等の職務は、スルタンおよびその親族を示すアミールや、その下位にあったハージブ等の階級とは区別して考えるべきである。その意味でナーズィムが、ホラーサーンのスィパーフサーラールをスルタンの次に置いたことは訂正さねばならない。ナーズィムは、マフムード時代、スルタンの兄弟ナスル Nasr b. Sabuktigin がその職にあったと言うが、ナスルの死後はアルスラン・ジャズィブ、ガズィイー、アリー・ダーヤといった者達がこの職に就いており、別にスルタンの親族がこの職に就くと決まっていたわけではない。また同時代史料の中にはホラーサーンのスィパーフサーラール職が他の軍事職に対して優越であったことを示すような記述は見られない。それゆえ、マフムード時代、ナスルがスルタンの次に位置する軍人であったとしても、それは彼がホラーサーンのスィパーフサーラールであったからではなく、スルタンの兄弟たるアミールであったがためと考える方が妥当である。

第二はカーイドについてである。確かにアラビア語で書かれた *al-Ta'rikh al-Yamini* には「カーイド」という語が頻出する。しかしそれらは多くの場合、軍人の特定の階級を示すものというよりペルシア語の *salār* と同様、一般的な意味での「將軍・指揮官」をあらわす名詞であるように思われる。逆に最も詳しい史料たる *Ta'rikh-i Bayhaqi* にはこの語は殆ど現れない。唯一、カーイドと呼ばれているのは、ホラズムにいた「Kujāt 族のサーラール Malanjūq」という人物だけである [TB: 402, 407]。もしカーイドが将校の階級を示すものだとしたら、余りに記述が少なすぎると言えよう。

最後にハイルトタシュについてであるが、これに関しては、既にボズワースが「naqīb-i khayltashān」という言い方を例にあげ、ハイルトタシュは将校の階級をあらわすというよりも、むしろ何か特定の機能を持つ軍の構成要素を指すのではないかと述べている [Bosworth 1960: 46]。

いずれにせよ軍の下部組織については十分な情報がなく、正確な姿が描き出せないというのが実情である。

- 11) この人名についてボズワースは「Mengü-Direk」と読むことが可能ではないかと述べている [Bosworth 1977: 151]。

- (iii) ホラズムシャー・アルトゥンタシュに宛てた手紙の中で、マスウードは何度かアルトゥンタシュを「有徳のハージブ(ḥajib-i fadil)」と呼んでいる [TB : 95, 102, 105, 277, 417]。
- (iv) マフムードの父セビュクテギン Sabuktigin の墓碑銘には「偉大なるハージブ(al-ḥajib al-ajall)・アブー・マンスール・セビュクテギン」と刻まれている¹²⁾。
- (i), (ii)の例は、ハージブへの任官が名譽の位階の授与という性格を持っていたことを示している。また、「ハージブ」という語が一種の身分・階級を示したとすれば、それは当然称号としても用いられたであろうが、(iii), (iv)はその例である。

以上見てきた如く、「ハージブ」という語は軍事的意味を有し、特に史料においては軍人の一種の身分・階級を示すものとして用いられているのである。

それでは侍従としてのハージブと軍人としてのハージブはどのような関係にあったのか。キョプリュリュ、アンワリーによれば両者の間には時間的違いがあった、すなわち一人のハージブが侍従として務めと軍人としての活動を同時に行なうことはなかったということになる。しかし、果してそうであったのだろうか。次章では、史料に比較的記述の多い大ハージブの活動を調べることによってこの点を検討してみたい。

Ⅲ 大ハージブについて

大ハージブ(ḥajib al-ḥujjab, ḥajib al-kabīr, ḥajib-i buzurğ)は、その名が示す通りハージブの長であった¹³⁾。その任命に際しては、黒の上着、二本の角付きの帽子、金の腰帯、太鼓、立派な軍旗、旗幟に付ける玉(manjūq)、杯、グラーム、銀貨入りの袋、布地、その他の物が与えられた [TB : 196-97, 648]。

マフムード、ムハンマド、マスウードの時代を通じて、史料より大ハージブであったことがわかるのは、アルトゥンタシュ、アリー・カリーブ、ビルゲテギン、スュバシュ、パドゥル、の五人である。前掲の表と重複する部分もあるが、以下彼らの活動を概観する。

① アルトゥンタシュ

マフムードのハージブであった。サーマーン朝の一族、イスマーイール・アルムンタ

12) Flury 1925 : 63.セビュクテギンはガズナの支配者となった後も、自らをサーマーン朝の臣下と考えていたようである [Bosworth 1973 : 41]。彼の墓碑名に「ハージブ」と刻まれているのは、彼が自身をサーマーン朝の君主たるアミールの下に置いていたことの現れであろう。

13) マスウードは Mangītarak をハージブに任じた際、彼に対して「ハージブとして兄弟アリー(大ハージブ・アリー・カリーブ)の指揮下(zīr-dast)に入るように。」と言っている [TB : 55-56]。これは、大ハージブがハージブを統率する者であったことを示すものである。

スィル Isma'īl al-Muntaṣir の乱¹⁴⁾ (390-95/1000-05年)の時、大ハージブとして軍を率いて戦った。その後マフムードの数々の遠征に従軍し、またアルスラン・ジャーズィブ Arslān Jādhīb とともにグール Ghūr, ガルチスターン Gharchistān へ軍を進め、両地を服属させた。408/1017年、ホラズムの支配者であったマアムーン家の内紛に乗じて出兵し、同地を征服したマフムードはアルトゥンタシュをその地に任じ、以後彼はホラズムシャーとしてホラズム統治にあたった。423/1032年、カラ・ハン朝の一族、アリーテギン 'Alī-tigīn との戦いにおいて戦死した [TY: I. 328, 387, II. 64, 98, 123, 140-41, 149, 251; ZA: 179, 182, 187; TB: 440-48, 908]。

② アリー・カリーブ

Zayn al-Akḥbār ではスルタン・マフムードと姻戚関係にあったと記されている。おそらくはアルトゥンタシュがホラズムシャーとなった後、大ハージブに任じられたのであろう。彼はマフムードの死に際し、グーズガーナーン Gūzgānān にいたムハンマドをガズナに招いて即位させた。そしてムハンマドが在位していた五ヶ月間、宮廷、軍の全権が彼の手に握られていた。しかし彼はテギーナーバードでムハンマドを廃し、軍を率いてヘラートのマスウードのもとへ行き、そこで捕えられ、結局獄死した [ZA: 194-96; TB: 13, 59, 62-66]。

③ ビルゲテギン

アリー・カリーブの失脚後、大ハージブに任じられた。その後、一時バグラーン Baghlān, トハリスターン方面にあってその地を抑え、またホラーサーン北辺に跳梁跋扈するトゥルクマーンを駆逐するため、軍を率いてニーシャープール Nīshapūr からサラフス Sarakhs 方面へ進んだ。マスウードのグルガン遠征の際には、ワズィールから任を引き継いでバルフ Balkh, トハリスターンの秩序を回復したが、そこからグルガンへ向かう途上、病没した。一方、宮廷にあっても、スルタンとワズィールおよび各庁の長官達の間で命令や伝言を仲介し、また、アフマド・ブン・アブド・アッサマドがワズィールに就任した時は彼をマスウードの前へ先導するなど、侍従としての務めも同時に果していた [TB: 321, 359, 475, 476, 569, 607]。

④ スュバシュ

427/1035年、ビルゲテギンの後任として大ハージブとなった。その直後、一万の騎兵と五千の歩兵を率いてバルフを出発し、ホラーサーン軍と合流して、以後約三年間ホラー

14) サーマーン朝滅亡後、イスマールはカラ・ハン朝により幽閉されていたが、390/1000年、脱出し、軍勢を集め、マールワール・アンナフル Ma warā' al-nahr から一時カラ・ハン朝勢力を追った。しかしその後カラ・ハン朝の主力にやぶれ、ホラーサーンへと転進し、395/1005年にメルヴ Marw 近郊で殺されるまで、同地のガズナ朝軍と戦い続けた。Frye 1975: 159-60参照。

サーンにおいてセルジューク・トルコとの戦いを継続した。430/1038年に始まるマスウードの対セルジューク親征の間はガズナ朝軍の右翼の指揮をまかされていた。431/1040年、ダンダーナカーン Dandānaqān での大敗の後、敗戦の責を問われ、逮捕、投獄された[TB: 648, 650-51, 707-09, 715-16, 718-19, 758, 802, 873-76]。

⑤ バドゥル

431/1040年、スュバシュの後任として大ハージブとなる。その後王子マウドゥード Mawdūd の軍に従ってガズナから Haybān へと向かった[TB: 877, 890-91. 尚, 稲葉 1986: 152-53参照]。

以上の五人の活動を見て目立つのは、やはり彼らの軍人としての働きである。実際、ボズワースは、

スルタン自ら戦闘の司令官として行動しない時は、大ハージブが戦場における最高司令官であった。それゆえ430/1041年のダンダーナカーンにおける最終的敗北の直前まで、マスウードは、侵入してくるセルジュークとのホラーサーンにおける戦いを、その最高司令官スュバシュにまかせていたのであった。[Bosworth 1965]

と述べている¹⁵⁾。確かに史料からは、大ハージブがガズナ朝軍内における最も有力な軍人の一人であったことが容易に看取される。しかしながら、ビルゲテギンが大ハージブとして軍事的活動を行ないながら、同時に宮廷にあっては侍従としての務めをも果していたことを看過してはならない。*Ta'rikh-i Bayhaqi* には、スュバシュが大ハージブとなりホラーサーンで戦っていた間のガズナの状況を述べた、次のような記述がある。

全ての宮廷内の仕事(shughl-i dargāh)は、大ハージブ・スュバシュの代理として彼(ハージブ・アブー・アンナスル)が行っていた。というのも[スュバシュが]バル

15) 試みに428/1036-37年のガズナ朝領域内の軍の配置を見てみると、まずガズナにスルタン・マスウードがいた。ホラーサーン方面ではニーシャープールに大ハージブ・スュバシュとワズィール・アフマド・ブン・アブド・アッサマドが配されてセルジューク・トルコと戦い、バルフでは王子マウドゥードとホラーサーンのスィパーフサーラール・アリー・ダーヤがカラ・ハン朝勢力の南下を警戒していた。ラホールには同じく王子マジュドゥード Majdūd が配されており、イラク方面では 'amid のアブー・サフル・ハムダウィー Abū Sahl-i Hamdawī とスィパーフサーラール・タシュが、カーク朝およびそれと手を結んだトゥルクマーンと戦っていた。確かにこの時期、ガズナ朝にとって最も大きな問題は、Tughril Bek, Chaghrī Bek に率いられたセルジューク・トルコが存在であり、その意味で戦略的重要性の最も大きいホラーサーンにスュバシュが配されていたことは、彼がガズナ朝軍内で最も重要な地位を占めていたことを示しているように見える。それゆえボズワースの説明は十分妥当なものと考えられるが、只、「大ハージブがガズナ朝軍の最高司令官であった」ことを直接的に示すような記述は、残念ながら史料からは見い出せない。

フからホラーサーンへと向かう際、その事をアミール(マスウード)に願ひ、許可を得ていたのであった。[TB: 666]

これは、宮廷内にも大ハージブが果すべき務めがあったことを明白に示すものである。そしてそれが侍従としての務めに他ならないこともまた確かなことである。

さて、以上述べてきた如く、ハージブの統率者たる大ハージブが軍の司令官であると同時に侍従でもあったという事実から、その統率下にあった他のハージブ達についても同様のことが言えるのではないかという推測が導き出される。そしてその推測は、次の二つの例によって裏付けられるのである。

- (i) 451/1059年、第十一代スルタン・ファッルフザード Farrukhzād の時代にも、かつてマスウードによりハージブに任じられたアブー・アンナスルはハージブとして仕えており、時に応じて軍を率い、ガズナにあっては王国の政策に意見を述べ、他国から使節が来た時には人々に儀典を説明したと言う [TB: 377]。
- (ii) マスウードの意に反して一人の徴税官が処刑された時、マスウードは宮廷グラームのサーラルであるベグトゥグドゥを、「お前はハージブであり宮廷にいるのだ。それなのにどうしてこのような事を認めたのか。なぜ私に知らせなかったのか。」と詰問し、責めた [TB: 562]。

このように、平素、スルタンの側に侍従として仕えることの多かったアブー・アンナスルも時として軍を率い、宮廷グラームのサーラルとして主に軍事的任務を負っていたベグトゥグドゥも、宮廷にある時は、宮廷の監督者、すなわち侍従としての務めを果すように求められていたのである。ゆえに、キュプリュリュ、アンワリーの述べる如く、まず侍従としてのハージブとなり、後に他の職に任じられてからもハージブと呼ばれたというのではなく、一人のハージブが、時に応じて侍従としても軍人としても働いていたと考えねばならない。すなわち、ガズナ朝のハージブとは侍従、軍人の両方の機能を持つ者であったのである。

IV グラームとハージブ

最後に、これまで述べてきたような機能を持つハージブが、ガズナ朝の国家体制の中においてどのような意味を持つ存在であったのかを、特にグラーム=奴隸軍人制度との関係において考えてみたい。

個人のハージブの経歴等について、詳しいことは史料からは殆どわからない。しかし幾つかの例から、この時代、グラームからハージブへという一つの昇進のコースが存在して

いたのではないかと考えられる。以下この点を検討してみよう。

グラームの昇進システムに関する最も有名な言及は、セルジューク朝のワズィール・ニザーム・アルムルク Nizām al-Mulk の著書である *Siyāsat-nāma* の中に見られるものである¹⁶⁾。

サーマーン朝の時代にはまだこのような[グラームの昇進の]方法が採られていた。[主君への]奉仕の度合いやその能力に応じて、グラームは徐々に昇進していった。それは次のような具合であった。

グラームが購入されると、最初の一年間、彼はザンダニージュ織(zandanījī)の上着を着、長靴を履いて、歩兵として馬廻りの仕事をするよう命ぜられる。このグラームにはこの一年間、公私にかかわらず騎乗することは命ぜられない。もし[彼が馬に乗ったことが]明らかになれば微罰が与えられる。

一年間、長靴を履いて仕えと、班長(withaq-bashī)はハージブに報告し、ハージブは帝王に報告する。その結果、生皮製の鞍(zīnakī dar khām girifta)と飾りのない皮紐でできた馬勒(ligāmī duwāl-i sada)を付けた一頭のトルコ馬が与えられる。

また一年間、馬と鞭でもって仕えと、三年めには腰に帯びる長剣(qarājūr)が彼に与えられる。

四年めには騎乗時に身につける矢筒(kīsh)と弓入れ(qirbān)が与えられる。

16) *Siyāsat-nāma* のこの部分については、既に佐藤 1959 : 65-66にその大要が訳されている。*Siyāsat-nāma* については現在までに数種の写本が知られており、それらに基づいて幾つかの校訂テキストが出版されている(それらについては SN-d の序文、および勝藤 1976 : 註①参照)が、佐藤氏が利用されたのは、そのうち Ch. Schefer により校訂されたテキスト(*Siasset Namé de Gouvernement, I texte persan, éd. par Ch. Schefer, Paris, 1891*——以下 SN-s と略記)である。SN-s はパリ、ロンドン、ベルリンにある三種の写本(最も古いパリ写本は690/1291年書写という)に基づいて校訂されたものであるが、近年、673/1274-75年の日付を持つ写本が新たにタブリーズにおいて発見された。SN-d は全面的にこの写本によったものである(この新写本については、Darke 1978 : xi-xii 参照)。

さて、当該部分[SN-s : 95 ; SN-d : 141]について両テキストを比較してみると、両者の間かなりの相違が見られる。中でも最も大きな違いは、(i) SN-s ではグラームの四年めの仕事の部分が欠けている、(ii) SN-d では六年めに杯捧持と水捧持の仕事をするようになっていたが、SN-s では杯捧持、水捧持の記述がとばされ、六年めには衣裳捧持の仕事をするようになっていた、(iii) その結果、「班長」になるのが、SN-d では八年めであるのに対し SN-s では七年めとなっている、の三点である。*Siyāsat-nāma* のこの部分の記述は、グラーム=奴隸軍人制度の実態を考える上で、我々に貴重な手掛りを与えてくれるものであるが、少なくともこの部分に関しては SN-d の方がより信頼しうるものであることは明らかである。それゆえ、今回 SN-d を利用してこの部分の全訳を試みた。

五年めにはより上等な鞍, 星の飾りのついた馬勒, 上着, 専用の環に吊して持つ棍棒(dabbūs)[が与えられる]。

六年めには杯捧持(saqī)や水捧持(ab-dar)の仕事が命ぜられ, 腰にカップを吊すことになる。

七年めには[君主の]衣裳捧持(jama-dar)の仕事[が命ぜられる]。

八年めには, 支柱が一本で十六本の杭を持つ(yak sar shānzda mīkh)小テントが与えられる。そして三人の新たに購入されたグラームが, 彼の[指揮下の]騎兵とされ, 彼には「班長(withāq-bashī)」の称号(laqab)が与えられる。また彼は, 銀糸で飾られた黒いフェルトの帽子, ガンジャ織(ganzī)の上着を着用することとなる。

このようにして毎年彼の衣裳, 装備(tajammul), 騎兵, 地位(martabat)は増していく。そしてやがては *khayl-tashī*¹⁷⁾ となる。その後, また同様にしてハージブに昇進する。しかし, 彼の有能さ, 技能(hunar), 勇敢さが衆人の知るところとなっても, また彼が大きな功績をあげ, 配下を持ち, 主君に忠節を尽していても, 35才か40才にならないうちはアミール位(amīrī)は与えられないし, 領地(wilāyat)に任じられることもない。[SN-d: 141]

ここでは, 購入されたグラームが年とともに幾つかの段階を経て昇進し, ハージブに, そして最後はアミールにまで到るという過程が述べられている¹⁸⁾。これほどに詳しい記述はガズナ朝の同時代史料たる *al-Ta'rikh al-Yamīnī, Zayn al-Akhhbār, Ta'rikh-i Bayhaqī* には見られないが, それらの中にもグラーム出身の者がハージブとなったと, はっきりと記された例がある。

- (a) サーマーン朝のヌーフ・ブン・マンスール Nūḥ b. Maṣṣūr の時代(976-997年)に大ハージブであったフサーム・アッダウラ・アブー・アルアッパース・タシュ Ḥusām al-Dawla Abū al-'Abbās Tāsh は, もとはアブー・ジャアファル・アルウトゥビー Abū Ja'far al-'Utībī(アブド・アルマリク・ブン・ヌーフ 'Abd al-Malik b. Nūḥ のワズィール)のグラームであった[TY: I. 96; ZA: 166]。
- (b) セビュクテギンは最初, サーマーン朝のアブド・アルマリク・ブン・ヌーフの臣下でホラーサーンのスイパーフサーラールであったアルプテギン Alptigīn にグラーム

17) SN-s: 95では「khayl-bashī」となっており, 佐藤 1959: 65は「騎兵隊長(xail bašī)」と訳している。Darke 1978: 103では“troop-leader”と訳されているが何の説明も付されていない。

18) ボズワースは, 「ニザーム・アルムルクはおそらくここにおいて, 現実というよりむしろ理想を描いているのであろう。」と評している[Bosworth 1973: 102]。

として売られたが¹⁹⁾ [TB : 255], 死後、彼の墓には「偉大なるハージブ」と刻まれた [Flury 1925 : 63]。

- (c) マスウードの最初のグラームであった Qaratigīn は後にマスウードのハージブとなった [TB : 134]。
- (d) マフムードのグラームであった Arslan, Qay Ughlan の兩名は、マフムードのレイ遠征の際にマスウードに接近し、マスウード即位後、各々ハージブに任じられた [TB : 159]。
- (e) マスウードの叔父ユースフ Yūsuf b. Sabuktigīn は自身のグラームの Ṭuḡhril を抜擢し、ハージブとした [TB : 331]。

これらの例から、サーマーン朝、ガズナ朝の時代、グラームの中には、昇進してハージブとなることができた者もいたことがわかる²⁰⁾。

翻ってガズナ朝の軍の構成を考えてみると、既にボズワースが指摘している如く、ガズナ朝軍は様々な構成要素を持っていたのであるが、その中核となったのは、スルタンの親衛隊としての性格を持つと言う、スルタン直属のグラーム達 (ghulamān-i sarāy, ghulamān-i sulṭān, ghulamān-i khaṣṣ) からなる軍団であった。マスウードの時代、その数は四千から六千にのぼったと言われる。屈強にして忠誠心厚きこの軍団は、戦場にあつては精鋭部隊として活躍した [TB : 688, 753 ; Bosworth 1973 : 104]。このように、元来軍事的性格の強かったグラーム達のうちから、やがて解放され、主君との個人的関係において抜擢され [稲葉 1986 : 144-45], 上記の如く昇進してハージブとなる者が出たのである。そして彼らは、宮廷にあつてはスルタンの側近くに仕えて宮廷を監督し、宮廷外では指揮官として軍団を指揮したのであった。スルタンにとってこのようなハージブ達は十分に信頼しうる存在であり、特に軍事面では彼らを軍のトップに置くことによって統帥権を一手に

19) セビュクテギンが息子マフムードのために遺したと言われる *Pand-nāma* は極めて興味深い史料であるが、その中で彼の生い立ちと、グラームとしてアルプテギンに売られた経緯が語られている [Merçil 1975 : 213-18, 227-29]。

20) Frye 1975 : 144 参照。尚、やはりハージブに任じられたホラズムシャー・アルトゥンタシュの息子 Satī (本文28頁参照) がグラームであったという記述は史料には見られない。しかし、Satī がアルトゥンタシュからマスウードに差し出されていた人質であったであろうことは、おそらく確かなことである。422/1031年、ヒンドゥースターンのスイパーフサーラールに任じられたアフマド・イナルテギン Ahmad-i Īnaltigīn は、自分の息子を人質として宮廷に残して任地に出発したが、その息子はスルタンのグラーム (ghulam-i khaṣṣ) の館に置かれたと言う [TB : 354]。人質として宮廷に留めおかれた臣下の子息達の境遇について、史料は殆ど沈黙しており、断定的なことは無論言えないのであるが、Satī もまたマスウードのもとでグラームとともに訓育されていたという可能性も否定できないであろう。

握り、その軍団を手足のように操ることが可能になったと考えられる。

このようにハージブは、まさしくガズナ朝の政治的支配層の極めて重要な構成要素であったのである。

おわりに

以上、史料の用例に基づいてガズナ朝のハージブについて考えてきた。その結果、ハージブが、侍従と軍の指揮官という二つの機能を同時に持つ者であったこと、主にグラーム出身であった彼らが、侍従として軍の指揮官として、スルタンの手足となって働き、ガズナ朝の国家体制において重要な役割を果たしたことを確認しえた。本文中でも述べた通り、ガズナ朝におけるハージブの存在は、グラーム=奴隷軍人制度に立脚したガズナ朝国家の特質と深く関わっている。

原則としてイスラム諸王朝は、結局は職業的軍隊、あるいは遊牧集団を有する中央集権化された国家により行使される軍事力の上に成立してきた。しかしながらガズナ朝ほど、その君主達のパーソナリティーと、彼らが指揮した軍事組織とを中心に動かされた王朝はない。[Bosworth 1960 : 37]

とはボズワースの言であるが、そのような状況を現出せしめた一因がこのハージブ達の存在であったことは、本論の説明から明らかであろう。また、同じ人物が、宮廷においては侍従として、外においては軍の指揮官として活動していたという事実自体が、逆にガズナ朝の軍事国家としての特徴の一端を示しているとも言えよう。

本論作成に際し間野英二氏より多くの貴重な御教示を頂いた。また、史料、文献の参照に関して森本公誠氏、井谷鋼造氏の御厚意に与かった。末筆ながら記して謝意を表する。

文 献

〈史料〉

H'A : anonym., *Hudūd al-'Ālam*, ed. M. Sütüda, Tehran, 1340.

QB : Yūsuf Khaṣṣ Ḥajīb, *Qutadghu Bilig*, ed. R.R. Arat, Ankara, 1979.

RD : Hilāl al-Ṣābi', *Rusām Dār al-Khilāfa*, ed. M. 'Awad, Baghdad, 1964.

SN-d : Niẓām al-Mulk, *Siyāsat-nāma*, ed. H. Darke, Tehran, 1976 (3rd edition).

TB : Abū al-Faḍl Bayhaqī, *Ta'rikh-i Bayhaqī*, ed. 'A. A. Fayyād, Mashhad, 1977.

TY : Abū Naṣr Muḥammad al-'Utḫī, *al-Ta'rikh al-Yamīnī* in Shaykh Maṭīnī's *al-Fath al-Wahbī*, 2vols., Cairo, 1869.

ZA : 'Abd al-Ḥayy Gardīzī, *Zayn al-Akḥbār*, ed. 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Tehran, 1968.

〈参考文献〉

Ahmad, N.

1971 A Critical Examination of Baihaqī's Narration of the Indian Expeditions during the Reign of Mas'ud of Ghazna, *Yād-nāme-ye Abū-l-Faḍl-e Bayhaqī*, Mashhad.

Anwarī, Ḥ.

1976 *Iṣṭilāḥāt-i dīwānī, dawra-i Ghaznawī wa Saljūqī*, Tehran.

Bosworth, C. E.

1960 Ghaznevid Military Organization, *Der Islam*, 36.

1965 Article in *EF*, "Ḥādhīb, iii Eastern Dynasties."

1973 *The Ghaznavids*, Edinburgh, 1963, reprint Beirut.

1977 *The Later Ghaznavids*, Edinburgh.

1985 Article in *Encyclopaedia Iranica*, "Amīr-i Ḥaras."

Dankoff, R. (tr.)

1983 *Wisdom of Royal Glory (Kutadghu Bilig). A Turco-Islamic Mirror for Princes*, Chicago & London.

Darke, H.(tr.)

1978 *The Book of Government or Rules for Kings*, London, 2nd edition.

Flury, S.

1925 Le décor épigraphique des monuments de Ghazna, *Syria*, 6.

Frye, R.N.

1975 The Sāmānids, *Cambridge History of Iran*, vol.4, R.N.Frye (ed.), Cambridge.

Иванов, С. Н.(пер.)

1983 Юсуф Баласагунский, *Благодатное Знание*, Москва.

稲葉 穰

1986 スルタン・マスウード時代のMaḥmūdiyyānとMas'ūdiyyān, 『東洋史研究』, 45(2).

勝藤 猛

1976 『統治の書』について, 『東洋史研究』, 34(4).

Köprülü, F.

1967 Article in *İslām Ansiklopedisi*, "Ḥācīb".

間野英二

1984 『クタドゥグ・ピリグ』近刊訳本3種, 『西南アジア研究』, 23.

Merçil, E.

1975 Sebüktegin'in Pendnâmesi (Farsça metin ve türkçe tercümesi), *İslâm Tetkikleri Enstitüsü Dergisi*, 6(1-2), Istanbul.

Minorsky, V.

1970 *Hudūd al-'Ālam. The Regions of the World*. 2nd ed. C.E.Bosworth, Cambridge.

Nāzım, M.

1971 *Sultān Mahmūd of Ghazna*, Cambridge, 1931, reprint New Delhi.

Salem, E. A.(tr.)

1977 *Rusām Dar al-Khilāfah (The Rules and Regulations of the 'Abbāsid court)*, Beirut.

佐藤圭四郎

1959 サーマーン朝の奴僕 *γulām* について, 『東洋史研究』, 18(1).